

物語の魔力

—欧米文学を再話して—



橋本賢二編著

はじめに

橋本 賢二

大阪教育大学欧米言語文化講座・英語圏の米文学研究室が出版する論集もこれで7冊目となります。毎回その年を象徴するようなテーマを設定し、学生と教官が一体となり、新しい時代に向けたアメリカ文学・文化研究の手法を模索してきました。文学研究に新たな時流を生み出そうと、悪戦苦闘しながらみんなががんばった成果を、本という形にまとめて広く社会に問いかけてきました。以下がそのシリーズです。

『アメリカエンターテインメントの世界―』(2003年度)

エンターテインメントを考えるという企画で始まった「大阪教育大学米文学研究室」出版シリーズの第一号。「楽しみながら学ぶ」ということを基本理念にすえて、楽しいこととは何か、娯楽とは何かを真剣に討論し合い、各自がたどりついた結論へ向けて、現地取材やフィールドワークを交えながら果敢に迫りました。食、絵本、スポーツ、映画、テーマパーク、ショッピングなど、人の心を捉えるものの根源に目を向ける企画でした。残念な点は予算不足で、紙面のサイズが半分になってしまったことです。

『日本で見つけたアメリカ―戦前日米交流史―』(2004年度)

「日本国内においてアメリカ文化研究の実地調査はできないものか」という思いから始まった企画。周りはずべてアメリカからもたらされたものが多い現代の日本で、アメリカ文化一色になるまえ、つまり第二次大戦以前の日米交流の歴史を、今もどこかに残る建物、事物、風習、言い伝えなどから見つけ出し、今日的光を当てて再検証し、記録し保存しようとするフィールドワーク的試みでした。学生たちも神戸、大阪、のみならず、横浜、九州まで足を運んでくれました。大阪の図書館では地域の研究として永久保存されることになり、複数冊献本しました。また神戸市図書館などからも寄贈の依頼を受けました。

『米文学史のなかのアメリカ文化研究』(2005年度)

論文としての質はもっとも高まり、量的にも充実したもの。「アメリカ文学史」受講生を中心に、開拓時代から現代に至るアメリカの歴史のなかで、あるいは

授業のなかで、もっとも心動かされた対象をひとつ選んで、アメリカ文化を探る気持ちで調査研究し論じてもらいました。[文学研究と文化研究の融合]を図る新たな挑戦です。文学研究の展開の新境地として小説や作家の人生の中に、魅力、文化の違い、起源、今もって有益なるモノなどを見つけ出し、論証するという企画でした。

『ジャパニーズ・ポップ・カルチャー2006—日本の若者・大衆文化のいま—』(2006年度)

アメリカ文学、文化から一旦離れ、日本文化を海外に発信することに挑戦してみました。折しも日本ブームのなか、「英語を使うわれわれ学生や研究者が今できることは何か」を探る意味を込めての企画ともなりました。日本語のみならず、英語、フランス語、中国語などを駆使して執筆しました。今日本の若者、大衆には何が流行っているのかを、現地取材して報告する企画。東京まで足を運んだ者、海外から参加してくれた者、日本人以外の参加者も増えてきました。ドイツの国立図書館から寄贈して欲しい旨の依頼を受けました。また大阪の公立図書館より永久保存用に複数冊の寄贈依頼もありました。「大阪、御堂筋はアジアのファッション・ストリート」をいうイメージも打ち出しました。

『実学としてのアメリカ文学研究—歴史・人物・作品・映画から学んだこと—』(2007年度)

文学研究が下火になりつつある時代に、あえてその領域で人々を惹きつける展開はないものかと模索して、たどり着いた企画。小説、映画、演説、音楽、詩、演劇、ミュージカルなど「言葉」を介してなされた行為すべてを「文学」とみなし、過去から今日まで、米文学の歴史全般から各自の好みに応じてテーマを選び「それが心を捉える理由」、「自分に何を教えてくれたのか」など、各自のなかにフィードバックさせた「世界に二つとない論文を書く」ことを目指しました。誕生したのは、いわゆる新書の実学面にスポットライトを当てた「他人に模倣できない論集」です。この論集も同じく、全国の公立図書館、並びに文学部を併せ持つ大学図書館を中心に寄贈しました。またこの本が色々な地域の若い人々に少なからぬ影響を与えていたことを、後日知ることにもなりました。

『アメリカ映画研究を始めるまえに』（2008年度）

アメリカ研究を専門に行う学生ばかりではなく、一般の英語科目を受講する学生たちにもその門戸を広げた第一弾。時代は紙媒体から、音楽、映像、インターネットなどデジタルな媒体に移ってきている今の時代。あえてここでは、ヴィジュアルな文学的対象である「映画」のみに的を絞ってまとめてみることにしました。100名を越す学生が詳しく論じる紙数はなかったのですが、まずは映画論に至るまでの準備段階として、多くの人々の心を捉えている隠れた名作の紹介を中心にして編集しました。映画論を始めるまえに心得ておくべき区別と認識、準備することと採るべき手法、注意点なども示しながら、各人が思い入れのあるお薦め映画を論じながら紹介してくれました。

そして今年の研究テーマは再び文学そのものに戻ってきました。『物語の魔力—欧米文学を再話して』と題し、各人が気に入った文学作品を魅力がそのまま伝わるように語り直して、文学に触れる機会が少なくなっている現代の青少年層に読書習慣を拡大することを目指しました。英米文学に限定しなかったのは、ヨーロッパの文学にも優れた作品は多く、学生の専攻や感心にも広がりがあったからです。

結果として参加してくれた学生たちから「物語をリトールドすることにより、読む側ではなく、書く側に立って、作者側から文学作品を眺めてみる事ができた」という感想が聞かれ、再話することには文学教育に関して予期せぬ効用があることも発見できました。学生がリトールドしたあと書いてくれた感想のなかに「すでに完成している短篇小说を、さらに重要ポイントを落とさず短くすることがいかに難しいことかがわかった」「推理小説の再話には謎解きのヒントなどの入れ方で苦労した」というコメントなどがあり、はっと息を呑みました。実のところ、わたしの立てた計画にこのような効用があるとは、論集作成作業の終盤になってこれらの学生のコメントを読むまで気づけなかったからです。

アカデミックな舞台における文学の衰退が叫ばれる中、おもにこれまでは文化研究や映画論、比較文化などといった間接的研究手法に取り組んできました。しかし、今回は英米さらにヨーロッパの古典文学作品に直接回帰し、真正面から文学を教育の場で取り上げる方法を取ることにしました。結果として、このことが教育面において思わぬ効用をもたらしてくれたのです。今までどこの文

学部でもあまり教えられてこなかった「作者の側から見た小説」という視点を、教育と研究の場に提供してくれることになりました。これまですべて学生は読者の側に立って本を読み、作品を学んでいました。しかしここで初めて「作品の向こう側」に回り、違う角度から名作を眺めることができたのです。

作品のエッセンスを情感たっぷりに、イメージをわきあがらせながら、ポイントとなる台詞を駆使しつつ感動的に紹介してくれるような本があれば、文学から遠ざかっている学生たちも今から新たに小説や童話に興味を持ち、読書の楽しみを再認識してくれるのではないかと考えたのがきっかけでしたが、最後にはもっと大きなものに出会えました。

自分たちが興味を持った作品をひとつ採り上げ、その作品の愉しさが伝わるように、「あらすじを書くのではなく」セリフを交えながら、重要場面ではその興奮が伝わるように、刺激的でコンパクトな物語に再編集して欲しい」という少々ハードルの高いリクエストでした。さらに対象となる学生の数は今年も100名を越してしまいました。

大学院生を含め、米文学史、米文学研究などを受講する専門課程の学生のみならず、一般英語を履修する、文学以外を専門とする学生たちにも参加を願ったため、あまり難しい要求をだしてかえって文学アレルギーを引き起こしてはいけないと考え、急遽リトールドのない別コースも設けました。読んでみたい、あるいは読んでみてよかったと思う本を一冊簡単に紹介する「わたしの選ぶ一冊」コースも併せて設置し、結果的に多くの参加者を集めることができました。そしてここからもまた収穫がありました。副次的に、小説が苦手な人々の思いを知ることもできたのです。この声を活かせばまだまだ文学の裾野は広がっていくのではないのでしょうか。論集の後半にはこれが置かれています。なかには日本文学もありますが、それもご愛嬌。

副題にある「欧米文学を再話して」という部分は、結果的に「再話して（みて感じたこと）」という意味のAコースと、「再話して（ください）」という意味のBコースになってしまいました。ご了承のほど。

欧米言語文化講座以外では、教員養成課程と教養学科の両方から昨年度と同様に、実にさまざまな専攻の学生たちが幅広く参加してくれました。スポーツから理系、文系、芸術、各種教員、技術・家庭他それぞれ目指す道も関心事も大きく異なる学生たちが、ひとつの目標に向かって集合しました。

これらの学生のなかに、欧米言語文化の専門課程の学生を凌ぐようなすばら

しい着眼点を持った、文学少女や文学青年がいることにはとても驚かされました。そしてまた同時に、それらを楽しく語ってくれる学生たちの姿に、「古典文学作品も捨てたものではない」と再認識させられました。結果、まだまだこの時代にも「文学の砦」はあるし、「小説の逆襲」も起こりうると思うと強く感じる事となりました。

目 次

はじめに	橋本 賢二	i
文学の逆襲—物語る力に秘めた永遠の魅力	橋本 賢二	1
大阪教育大学 米文学研究室紹介【中国語】	郭 華	17

【第一部】

リトールドと解説

ルーシー・モード・モンゴメリ『赤毛のアン』(アンと緑の髪のおはなし) :プリンス・エドワード島の自然と作品	永田 梓	21
コナン・ドイル「ボスコム渓谷の惨劇」:シャーロック・ホームズの世界	井倉由加里	24
オー・ヘンリー「最後の一葉」:オー・ヘンリーの魅力	松原 香織	28
オー・ヘンリー「最後の一葉」:近代のニューヨークと文学	塩谷 彰久	32
オー・ヘンリー「賢者の贈り物」:長く愛される文学から感じる思いやりの心	富田 彩	35
ヘミングウェイ『老人と海』:偉大な作品との再会	大谷 恭子	38
ヘンリージェイムズ「ねじの回転」:得体の知れない恐怖を読み解く	田路 史歩	41
リチャード・バック『かもめのジョナサン』:生きることの真意	道廣 恵理	45
マーク・トウェイン『不思議な少年』:作品の作られた背景	向井 理恵	48
マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』(ごきげんなペンキ塗りのお話) :いきいきとした子どもたち	結城 秀佳	51
『トム・ソーヤーの探検』:少年たちの大冒険にわくわく	卯野 智広	53
マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』:悪童のヒーロー	松尾 泰子	56
「アウル・クリーク鉄橋での出来事」 :南米戦争時代における戦争経験者視点の文学	笠松 准司	59
ジョナサン・スウィフト『ガリバー旅行記』 :スウィフトがこの本から伝えたかったこと	山崎美紀子	62
ヨセフ・ジェイコブス「ジャックと豆の木」 :ヨセフ・ジェイコブスと <i>English Fairy Tales</i>	大塚 麻里	66
ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』(ウサギの穴に落ちて):作品の魅力	岸田美紗子	69
ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』:唯一無二のファンタジーの世界へ	山脇 未帆	71
アリス・ジーン・ウェブスター『あしながおじさん』: ウェブスターの伝えたかったこと	福井 佑那	74
ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』:愛され続けてきたオズ	小田 梨加	76
バウム『オズの魔法使い』:19世紀末のアメリカ経済	山浦絵梨奈	78
ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』:オズワールド	二宮垂哉奈	81
『エルマーのぼうけん』:化学者ルース・スタイルス・ガネットが愛した色と数の世界	松江志穂子	84

アンドレー・ラング『シンデレラーガラスのくつのものがたり』 :シンデレラのストーリーは著者によってどのように違うのか	山口 由華 88
A.A.ミルン『クマのプーさん』(プー横町に、イーヨーの家が、たつおはなし) :愛される「おばかさん」	大沢 麻友 91
C.S.ルイス『ライオンと魔女』:勇気と裏切らない心	藤原 涼子 94
シャルル・ペロー「長靴をはいたねこ」:西洋で生まれた児童文学	坂口 碧 97
ハリス・クリスチャン・アンデルセン『おやゆび姫』:児童文学の魅力	小川 陽香 100
フランツ・カフカ『変身』:不思議な現実を読む	河津美代子 104
ヤーコブ・グリム、ヴィルヘルム・グリム作『ヘンゼルとグレーテル』 :ドイツ児童文学を考察して	槇納 明衣 109
ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』【ドイツ】:青年期のシンパシー	勝木 晃平 111
ジェームス・マシュー・バリー『ピーター・パン・とウェンディ』 :ピーター・パン誕生の秘密	米原万紀子 114
マリー・ルイーゼ・ド・ラ・ラメー『フランダースの犬』 :フランダースの犬の魅力	石川 都 116
ヒュー・ロフティング『ドリトル先生』:みんな大好きドリトル先生	平良 紫野 118
エリック・カール『はらぺこあおむし』:みんなに愛されるわけ	乾 彩友美 121

『星の王子さま』/『シャーロットのおくりもの』/…ほか

【第二部】

わたしの選ぶ一冊:再話して欲しい物語り

まだ幼かったあの頃	久留島歌穂 133
オバマ政権になった今、もう一度、読み返してみたい『アンクル＝トムの小屋』	加賀谷茉莉子 134
『モモ』が教えてくれた時間と意識と心	島田 愛 136
いつからか本を読まなくなった自分	山内 映里 138
私にとっての本	石田 麻純 139
今になって改めて読んでみると…	杉本 結衣 140
『先生は魔法使い?』との出会い	桑野 愛美 141
不滅の探偵シャーロック・ホームズにあこがれて	高瀬 千鈴 142

『itと呼ばれた子』/『ヴェニス商人』/『秘密の花園』/

『ハリー・ポッター・シリーズ』/『若草物語』/『バッテリー』/…ほか

あとがき	橋本 賢二 177
------	-----------

文学の逆襲—物語る力に秘めた永遠の魅力

橋本 賢二

大学の教育現場において英米文学作品が教材から駆逐され始めて久しい。社会のなかにおける文学作品への関心も、映画、テレビ、ビデオゲーム、携帯電話、パソコン、デジタル・ツールなどが普及するにつれ、加速的に薄らいできている。文学部が縮小され、英文科が文化を中心とする専門課程へと鞍替えるのは、時代の趨勢として仕方が無い。しかしその先、フィクションである小説や、短篇、詩や戯曲といった文学作品自体にまでその影響が及び、教育や研究の対象としての文学の寿命が尽きる日は訪れるのであろうか。

さらに 100 年の歴史を誇る『英語青年』が実質廃刊になり、英文学会が会員の縮小に歯止めをかけられない現状は、就職先を含めたマーケットの希薄化、縮小化を示してもいる。

だからといって、このまま腕をこまねいて衰退を見届けるだけで、われわれ英米文学者の使命は果たされていくのだろうか。消え行く時代と価値観にノスタルジーで惜別の辞を寄せるだけが、とるべき道のようにも思えない。

そのようなわけで、今年は思い切って、衰退の一途にある『文学』そのものを真正面からとらえ、小説や短篇のなかになにか潜む「永遠の魅力」と「排他的なパワー」を探して、「文学の復権」に王道から挑戦することを思い立った。これまでは文学の擁護として、やや斜めに構え、今日的価値観に見合う文学の特質を控えめに探してきたが、今年は正統的手法を用いて、アカデミックな場所における文学の持つ永続的な可能性にスポットライトを当てることとする。

以下において、このような目標を達成するための手段として教育と研究の両面からその効果を求めて作成を決めた、論集『物語の魔力—欧米文学を再話して』の製作過程を示しながら、「文学のルネサンス」の必要性と可能性を同時に示していくこととする。

文学の砦—論集『物語の魔力』作成における目標と手順

何事始めるにもまず心の準備が必要である。前期の早い時機から話を始め論集の存在を知らせておき、時折昨年度までの完成論集を回覧する。6月頃に第一回の文書を該当の全クラスに配布し、実際の心づもりを始めてもらう。人の心はすぐには動かせない。人が動かないと嘆いているとき、その事態は指導者の要領の悪さに起因していることも多い。早めにアクションを始め、何度も繰り返すことが重要である。

予告： 論集『物語の魔力—英米文学を再話して—』（仮題）作成に関して

概要：

期間は 夏季休暇中。提出は 新学期初回。先ずは プリントアウト原稿で。修正指示、そのあと E メールでデータ添付送信。

内容：

文学も時代とともに厳しい状況を迎えているが、絵本や、童話、児童文学、おもしろいお話、味わい深い小説などは、ただ情報を得る手段としての読書とは違う楽しさを与えてくれる。まだここに「文学の最後の砦」があるのでは。

英米文学作品のなかで「自分が昔少し読んで気になっている」、「映画の原作となって興味を持っている」、「もう一度しっかりと読み直してみたい」と感じるような作品をひとつ見つけ出す。それらをもう一度読み直し、あらすじを述べるというのではなく、自分なりに「ひとに話してあげる」つもりでストーリー・テリングする。話の核を見つけて、おもしろい部分をつなげるなどして、楽しく感情が伝わるように、短く要点を語りながら、おもしろさ伝えてあげるつもりで書き直す。自分が楽しく、読む人がそれを知れてうれしくなることを目指して。ポイントの場面ではセリフなども使う。あまりむつかしく考えず、先ずは一度最小サイズで書いてみて、分量を確認しながら、部分的に膨らませていくカンジで始めてみましょう。短篇でもまだ短くできるものも多い。サンプルなどを参考に。

作品は、米文学が好ましいが、英文学でも、場合によれば、独文学、仏文学などの外国文学でもよい。

ジャンルは、短篇小説、長篇小説、演劇、詩などでもよいが、最近の映画など著作権が切れていないものは、なるべく避ける。好ましいものは、作者の没後 50 年を経ている作品。ネットなどで全文（の和訳）が公開されているようなもの。

形式：

日本語で書く。占有紙面分量は A4 横書きで 2 枚から 4・5 枚程度。最後の 1 ページには自分の感想、選んだ理由、リトールドをやり終えた後の気持ちなどを書く。書き方の、詳細は追って指示する。

参考サイト：

〔青空文庫〕 <http://www.aozora.gr.jp/>

全体の概要と、その目的、ならびに提出者たちにとって最も重要である〔提出物の分量、

内容] さらに [提出時期] をここに明記する。ここにおいて与えられた印象はまだ漠然としたものであり、繰り返しコメントすることにより、それらは少しずつ学生たちの心のなかで具現化されていく。この段階において自身の論文について意識を強く持っている学生はまだ少ない。

しばらくして、本格的告知が始まる。

Vol.1 は内容に関する意思統一のためのものとなる。なぜ今年の論集はこのようなテーマになったのか、それを書くことで何を強く訴えていくのか、どのような成果を求めて書くのかということに対する [基本方針] をここでははっきりと伝えることが必要になる。これを怠ると論集が方向性散漫となり、結束した力を失ってしまう。

Vol.1 『物語の魔力』（仮題）の書き方について

小説などの文学作品が英語の教材として敬遠され、娯楽の一手段としてもビデオゲームやそのほかの映像メディアに押されている現状の中で、もう一度文学の魅力を見直そうというのが今年度の論集の基本方針です。

「会話を理解するのは面倒」「言いたいことを探るのがむづかしい」「長くて読むのがつらい」「読書とは要点のみの内容を知るだけでいい」「忙しくて読む時間が無い」「人が多くて理解が大変」など、小説が敬遠されるようになった理由は様々です。

しかしまた逆に、こんな時代に新しく注目を浴びて読み始められた『カラマーズフの兄弟』や『蟹工船』などの作品もあります。かつての時代を知らない人々に関心を持たれたということもあるでしょう。また団塊の世代が一息ついて、人生の蒔き直しをしているのかもしれない。若い頃あこがれていたスポーツカーや大型バイクに乗ってみたいと夢を膨らませ、日本中を旅するためのキャンピングカーも人気です。そのなかで重厚な長篇小説の黄金時代であった19世紀などの文学作品が、向学心ある人々から再び注目を集め始めているのかもしれない。

小説を読むことには、新書や指南書、マニュアル本などを読むこととは異なる魅力もまたあるはずです。

たとえば：「今日希薄になってしまった人間関係を仮想的に味わえる」「人付き合いが苦手な人にとって、背景を知った上で、会話のサンプルを確認できる」「実生活の中で自分が知りえないような世代、階層、職場の人々の暮らしを垣間見ることができる」など、いろいろとメリットも残されているようです。

またそれをひとつにまとめあげている構成のほうに目を向けてみるならば、「人の心をつかんだまま放さず引き付けておき、与えたいと思って目指していた衝撃を最後に狙い通りに読者の心に残して終るテクニック」は、楽しいことをどこまでも求めながら、わかりやすさを同時に求める今日的要求にもぴったりとマッチするものでしょう。そのほかにも「その技巧を会社のプレゼンテーションのなかに利用する」などの実用的利用法が考えられます。

メディア全盛時代に政治までもがショー化している今日にあって、人の心をつかむ話術は「厳しい社会の荒野に行く若者にとって、何者にも変えがたい武器」ともなるでしょう。それを習得することは、他人と違ったひとつの特技として、きっといつか自分を助けてくれることでしょう。

さらにこの時点において、教官が作成したりトールドのサンプルを配布した。これが無いと具体的なイメージはいつまでもつかめないまま時間が過ぎていき、効率は悪くなる。これにより行うべき作業の輪郭が見えてくる。(サンプルは拙著『魔法とユーモアと童心の世界』からの抜粋である。)

次に必要なものは、各人が行う「物語の語り直し」の対象選定のための素材資料である。いくら英語専攻の学生といえども、【自分がもういちど簡単に短く再話してみたい作品】がすぐに浮かぶものではない。そこで手書きではあったが、対象となるような[純文学系米文学作品]と[アメリカなどの児童文学作品]のリスト他をこの間に配布し、それらに簡単な説明を付し、作品選定の一助としてもらった。

そしてひとりに1冊ずつ、これまでの論集を配布した。これは予算的にも厳しいものであるが、これまでに保存していたもののなかから(余裕のあるものに限って)放出して対応した。いくらインターネットで全文が読めるとはいえ、やはり本体を手にとると意気込みはあきらかに違ってくるようである。これによりイメージはさらに具体化し、先輩の論文のなかに参考となるものを探す学生も増えてくる。

今年は新型インフルエンザの影響で授業終了が1週間延びた。結局その影響もあり、最終的な詳細告知、執筆要領と執筆ツール等の提示は7月末の一括提供となった。「文学アレルギー」に対する「ワクチン接種」のような「予告編告知」から始まった指導も実質、ここでほぼ終了となる。現代人は入り口が見つからないとすぐにあきらめてしまう傾向も強い。どこから手をつけていいのかわからない、マニュアル全盛の時代に育った学生たちには、好みに応じて選べる選択肢を設けた、懇切丁寧な案内用の手引きもやはり必要となる。

専門課程以外の学生が取り組むためには、少しハードルを低くする必要も出てきたため、

当初の計画から選択の余地を増やし、「リトールドを含まないコース」も設けることとした。文学嫌いの学生たちには多くの具体的資料を示し、選べる幅を広げ、興味深いサンプルから研究のきっかけが見つかるようにと腐心した。

以下がその最後の指導文書である。

Vol.2 論集『物語の魔力』の執筆要領

『物語の魔力—欧米文学を再話して』（仮題）の執筆に関して。夏季休暇中に、案内を配布したすべての学生を対象に、論集に掲載する原稿の執筆を依頼します。論集は印刷され全国の図書館に配布され、インターネットで公開されます。学生時代の記念にぜひとも参加してください。提出者には（後期）成績に加点します。形式は二つに分かれます。文章が得意な人はAコース、苦手な人はBコースを選ぶことができます（ただし専門クラスの人はAコース）。パソコンのWORD（一太郎は不可）で入力、データも保存しておく。イラスト等を用いる場合は、完全に入れて編集を完成させておくこと。

提出日：新学期各授業初回。まずはプリントアウト原稿に指定の表紙を付け提出。後日指示を受け修正したデータを添付してEメールで提出。詳しくはあとに記載。

Aコース：

Aコースは リトールド + 紹介・小論（A4横書き日本語 2から5，
（6）枚）

これまでに気にかかっていた欧米の短篇小説、長篇小説、児童文学、詩、演劇などの文学作品のなかから、1作品を選んで、その作品をコンパクトに、短く書き改め、そのままでも味わえる小さな物語にして生き返らせるというものです。長い作品を読む時間が無い現代人、英米の作品のおもしろさを知ってもらいたい子供たちのために、著作権が切れている作品を中心に（作者の没後50年）、自由に書き直して日本語で短く作品を作ります。これは「あらすじ」のように情報となるようなものではなく、それ自体がおもしろい読み物となっている作品となります。印象深く、自分が受けた感動がまた読む人々にも伝わり広がるように、風景の描写やいきいきとした人物像の提示を心がけながら、重要な場面やクライマックスではセリフを使いながら、その感動を映画のワンシーンを切り出すように表現してみましょう。うまくできなくて当然ですので、あまり堅く考えずに、とりあえず、あらすじに印象的な展開を1箇所加え、そこ

を盛り上げるつもりでやってみましょう。あまり欲張っても紙面は足りません。

長篇作品はもともと一個の物語ではなく、盛り上がる場面が多いためこのような作業には適していませんが、その場合には、「〇〇のエピソード」「〇〇のお話」といったふうに、ひとつの挿話に限定して書いても結構です。

もちろん、作品の全体像をコンパクトにまとめ、輻輳する世界を示して感動を紡ぎだすことにチャレンジしてみてもけっこうです。やり方の基本は決まっていますので、自由に挑戦してみてください。字体、字のサイズ、行、列、範囲内の分量、ふりがななどは自分で判断してけっこうです。イラストも可能。以上が再話（リトールド）の部分です。

その後ろに作品の解説部分が来ます。ここには作家・作品の紹介やそれに関する小論文を書いても結構です。またその時代背景となる社会の状況などについて説明するような文章を置いてかまいません。文体、サイズなどは誰に読んでもらいたいかを考えて使い分けてください。

詳しくはあとにつづく。

Bコース：

Bコースは 読んでみたい作品・リトールドして欲しい物語など「わたしの1冊」+本や物語にまつわる思い出 (A4横書き日本語 1、2枚)。

・まず、日本を含めた世界の文学作品の中から、(ア)一度は読んでみたいと思っている文学作品、(イ)短く再話したり、マンガで復活させたりして欲しいと思っている作品、または(ウ)以前読んで感動した名作など、思い入れのある作品名 (日本語)を作家名 (日本語)、国名 (日本語)とともに挙げます。書き方別掲。

・そしてそのあとから、その作品を選んだ理由を書きます。

：すでに読んだ後の作品ならば、感想や、その作品にまつわる自身のエピソードなどをそのときの思いがよくわかるように、平明に、無理せず書き表してください。

：それがまだ読んでいない作品であった場合には、またその作品以外で、絵本や物語を読んでもらったり、読んで楽しかったりした思い出について、当時の雰囲気や気持ちが浮かび上がってくるように、自由な形で書いてみてください。(さしえ可)

これらの物語にまつわる感想文や思い出には、その全体像がよく伝わるように「『風と共に去りぬ』におけるスカーレットの生き方が教えてくれたこと」「小学4年生のボクと愛犬と絵本」「あの時読めなかった『若草ものがたり』」「今読

んでも感動するかな『〇〇の冒険』など簡単なタイトルをつけます。このような思い出もまったくない人は、「自分が本を読めなかった理由」とか「現代の若者の読書離れに関する考察」などとし、本とのかかわりの中で自分にあてはまることを探したり、その原因分析を行ったりしてもけっこうです。

それがあなたのページの先頭に付ける、大見出しの題名となります。その次に氏名。そのあとに、「わたしの選ぶ一冊」、そして題名なしで本文をおきます。執筆作品は感想文などに当たるので、著作権のことを考える必要はありません。最近の作品でもけっこうですが、(映画、マンガなどは除外し)原則文学のジャンルとします。イラストなどの使用に関しては指針に準拠して下さい。

参考文献について

リトールド作品を創作する場合は、拙著『魔法とユーモアと童心の世界—少女に贈るアメリカ短篇小説の系譜』(本学図書館に複数開架)のなかにかくつかの作品が再話されているので、書き方の見本とする。また物語の後ろには、解説もあり、それを書くときの参考にもなる。またそのなかの一部はすでに配布してある。

また先輩の論集を見たい場合は、「大阪教育大学米文学研究室」と入力してインターネットで検索すれば、本学図書館の〔OKUリポジトリ—[Osaka Kyoiku University Repository](#)〕よりこれまで刊行された本のすべての作品ページが閲覧できる。

これまでに配布した資料などから関心を寄せる作品が見つからなかった場合や、さらに詳しく見てから選定したいと思う場合には、次のような本がある。図書館で探してみても、本学に無ければ他大学より取り寄せて閲覧することができる。

拙著『アメリカ短篇小説の伝統と繁栄—二十世紀作品論』(大阪教育図書)

英米文学にみる家族像関係の幻想

イギリス小説のヒロインたち

英米児童文学の宇宙:子どもの本への道しるべ

英米児童文学の黄金時代:子どもの本の万華鏡

アメリカ文学のなかの子どもたち:絵本から小説まで

はじめて学ぶアメリカ文学史

はじめて学ぶフランス文学史

はじめて学ぶドイツ文学史

はじめて学ぶ英米児童文学史

たのしく読める英米児童文学

たのしく読める英米の絵本
たのしく読める英米青春小説 ほか
以上 ミネルヴァ書房

<http://www.minervashobo.co.jp/index.php>

また関心を寄せる作品があっても日本語への翻訳作品をどのように入手するのかわからない場合は、その作品の含まれている短篇集を書店で購入するか、図書館で同様に探してみる。またそれらが著作権の切れている作品の場合は、全文がインターネットなどで公開されている場合もある。

また次のようなサイトには、それらの作品がまさにリトールドされて日本語版と英語版の両方で公開されているので大いに参考になる。ただしこのようなものをそのまま拝借することはできないので注意すること。

アウルクリーク橋の出来事

スリーピー・ホローの伝説

バートルビー

などのアメリカ短篇作品が公開されている。分量的にも近いので、ぜひ見ておくこと。

http://www.eigozai.com/LL/STORY_F.htm

英語版は聞くこともできるすばらしいサイトです。

執筆時の物語の文字のサイズは大きい方が読みやすいが、紙面が増えるので、読める範囲であればよい。最終的にはインターネット公開時に拡大機能が使えるので、どんなサイズも読むことができる。また物語部分の漢字には[ふりがな]をつけてもよいが、フォントとサイズ、ひらがな使用、振り仮名に関しては、読んで欲しいと思う対象者の年齢に合わせて、自分で適宜判断する。イラスト等の使用も著作権に抵触しないものは、許可された紙面の範囲で、自由に使って楽しく構成するとよい。紙面はプリントアウトしたものをそのまま印刷して出版するので、挿絵などは自分で完成して入れたもの以外は掲載できないので注意すること。カラー画などはモノクロ印刷時にかえって見難くなる場合もあるので、事前に確認しておく。白黒の線画などが比較的きれいに出る。

翻訳作品に関して

・作家別作品一覧として『翻訳作家集成』というサイトがあり、ほぼすべての翻訳出版物がリストアップされている。

<http://homepage1.nifty.com/ta/index.html>

・本学図書館に『アメリカ短篇小説集ーロマン主義からリアリズムへー』（東洋出版）その他の翻訳書がある。

フリーイラスト素材に関して

イラストや写真、挿絵、カットなどは著作権のあるものがほとんどで、それらを使用するときには細心の注意が必要です。基本的には、著作権法第32条に照らし合わせて「研究のための引用」としてそれらを使用することができますが、自分で描いてみたり、許可されているものを使ったりする方が無難でしょう。以下に自由に使える素材を少し紹介します。あとは自分の作品に合ったものを探してみてください。

1) 「シリコンカフェ」サイト

<http://www.siliconcafe.com/gtool/data/index.html>

ここにいくつか出ています。

G-TOOL 使用許諾

G-TOOL は著作権フリーの Web 素材集と便宜上謳っていますが、正確には使用権フリーです。著作権は存在し、放棄したわけではありません。ですが著作権を持っているからと言って使用される方々の制作物に対して主張をするものではありません。G-TOOL は以下の項目に対して使用を許可しています

- Web サイト内のホームページでの使用
- 商用サイトでの使用
- もちろん個人サイトでの使用
- Web 以外での使用(印刷物、ゲーム、その他のメディア)
- 素材の加工

以上の許諾条件を見れば明らかなように特に規制はありません。唯一禁止している項目は次の二点です

- G-TOOL 内の素材ファイルへの直リンク
- 素材集としての無断転載及び、無断販売

2) またここにもシルエット的なイラストがあります。

イラスト素材

<http://www.siliconcafe.com/gtool2003/index.html>

フリーです。

3) 郵便局のフリーイラスト

<http://www.jp-network.japanpost.jp/amusement/downloads/>

*そのほか色々ありますが、なかなかぴったり来るようなものはまだ見つかりません。「フリー素材 教育」「フリーイラスト 人物」など入れて検索してみてください。

また いっそ海外のサイトを探してみるというのもありますが、なかなかまだ日本には紹介されていないようです。注意しながら探してみてください。自分で絵に自信がある人は描いたほうが早いかもしれません。

他にいいサイトを見つけた人は知らせてください。

基本事項を示しながら口頭でわかりやすく解説していく。全体的説明に加え、論集の意義をはっきりと伝えた。次にコース別の説明、詳細説明となる。ここにも文学復興の目的が明記されている。

Vol.3 Aコース 執筆マール

担当ページのタイトルは、リトールドする作家名「作品名」のあとに：をつけ同じサイズで解説部分の題名を続けたものを記載する（この部分の文字サイズが最大）。そしてあなたの氏名。そのあとに日本語で作家名をフルネームで書き「短篇題名」または『長篇題名』（エピソード名）を書く。そしておよそ1ページから2（～3）ページ以内に短く書き直した物語を置く。その字体やサイズは作品の雰囲気、イメージに合わせて変えて、ひらがなや振り仮名を使ったり、スペース、会話文などをうまく使用したりして、読みやすく工夫する。

そのあとに解説部分のタイトルを中央に置く（全体題名よりやや小さいサイズ）。そして章に分けⅠ、Ⅱ、Ⅲ、・・・と振って、各章に題名を付け、センタリングする（サイズはさらに小さく）。参考にした文献があれば最後に題名をつける。配分ページは全体から差し引きして考える。たくさん書きたい者は文字を小さくして全紙数基準を守る。以下はイメージサンプル、サイズなどは別紙参照。

ブレット・ハート「ロアリング・キャンプのラック」

: ゴールドラッシュの頃の西部と文学

美国 英五

フランシス・ブレット・ハート「ロアリング・キャンプのラック」

そのむかし西部の土地で金^{きん}が見つかった後、おおぜいのひとびとが世界中から押し寄せ、金鉱掘りたちの村ができていった……その集落ロアリング・キャンプには……

一見怖そうに見えていたその荒くれ男たちは、じつは優しい心を持った男たちだった。

「しっかりするんだ。そんなことであわてちゃいけねえ。おれたちがきっと見つけ出してやるからな」

思いもかけない男のことばに……

やがて洪水がおさまり……みんながあたりをさがしまわると……

その姿を見た村の人々の目からは涙がとめどなく流れていた。

ゴールドラッシュの頃の西部と文学

I. 作家と作品について

ブレット・ハートは正式にはフランシス・ブレット・ハート (Francis Bret Harte, 1836-1902) といい……「ロアリング・キャンプのラック」 (“The Luck of Roaring Camp”) は……

II. 当時の西部の金鉱村の暮らしとは

西部という言葉の定義は時代とともに変遷してきている……
大変な病気や……

III. 実際は無かったそんな金鉱の集落のくらし

ところがそんな金鉱にいる人々はすぐにまた別の場所へと移動して行き……
……

IV. 作品に込められた味わいが全米に受けた理由

浪花節のような人情話が受けた理由は、東部から離れたこんな泥まみれの場所にもそんな温かな心を持った人々が暮らしているのだという・・・

V.使われている技巧とレトリック

そんな社会が消えてしまったにもかかわらず、この物語を今読んでみてもおもしろいのは・・・

などと作品がおもしろい理由、自分が気に入った理由、愛されている理由などを織り交ぜながら、その時代の社会や地域の構造などに関して幅広く論じてもよい。ただしすべてが作品の味わいの肯定に役立つように。

長篇の題例としては

マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』（ペンキ塗りのおはなし）などとする。

さらに質問がある人はメールで自由に聞いてください。アドレスはシラバスにあります。

これらの執筆自体がじつは文学の芽を若者の心にめばえさせるきっかけとなっている。それも難しい場合のため、入門用として以下の活動機会も提供する。

Vol.4 Bコース 執筆モデル

・まず頭に全体のタイトルをつける。わたしの選ぶ一冊。小論の順。詳しくは別紙参考。長篇小説は『…の冒険』、短篇は「黒猫」のように、括弧を使い分ける。自分の論文全体の題名には「 」をつけない。改行、段落、誤字脱字など注意。サイズ見本は別に配布。

『赤毛のアン』を素直に読めなかったあの頃の私

柏木 今日子

わたしの選ぶ一冊

『大草原の小さな家』 ローラ・インガルス・ワイルダー（1867-1957）【アメリカ】

わたしは幼い頃、自然の豊かな瀬戸内海の島でのんびりと育った。年の離れた姉が一

人いたが、早くから東京に出ていたので、遊び相手もあまりなくて…

本を読むことが好きな方だったが、ある日同級生の友達から・・・とういことがあって、・・・そのとき以来モンゴメリーの書いたこの本を読みたいと思っていたが・・・

その後引っ越してしまい・・・ずっとその友人のことが気がかりだったが、・・・なかなか機会が無いまま今に至ってしまった。しかしあの本に出会ったことは、結局大きな思い出になった。

あの時は『赤毛のアン』のストーリーを聞いて・・・

今それを読み終えて次に興味を持っているのが、TVで見たこともある『大草原の小さな家』です。この作品に描かれている家族は・・・

私はそういうわけで当時は物語を心から楽しみ味わうことができませんでしたが、いまではもっと違う感情が生まれてきて・・・と思っています。

などと自分のエピソードを交えながら、文章を展開させてみましょう。

また題名例として

ボクが『ハックルベリー・フィンの冒険』（両家の戦争の話）で気づいた本当の××のように、挿話を特定した題名にしてもけっこうです。

私の選ぶ一冊と小論の本の題名が一致していても、していなくてもかまいません。

それを選んだり、題名に書いたりしている理由が、本文を読めばはっきりすることは絶対に必要な要件です。

読書を肯定できなかつた人は、

- ・・・などでお金がかかって・・・本も買えなくなり・・・も読まなくなつた、携帯やパソコンが時間を奪い・・・などと、それらを分析したり、自分の場合を当てはめながら考えたりして、それでも物語や文学作品を読むことのなかにあるメリットなどに、最後には触れるような、ポジティブな論述も心がけてください。1 ページでもOKです。

これらに加えて、昨年度までの論集のなかから、テーマや作風が比較的によく似た学生論文の抜粋をコピーして、書き方の更なるヒントとして、また文字サイズやレイアウト、写真の使い方などの参考として数枚配布した。

そして新学期における提出時の表紙も統一し以下のものを全員に配り、必要事項をその時点で記入させ、いよいよという気持ちを伝えた。

プリントアウト原稿表紙 右上とじる 各ページ下に番号鉛筆書き

() 曜日 () 時限 シートNo. ()

専攻 ()

学籍番号 ()

ふりがな (:)

氏名 [:]

コース種類の別： A B 「○つける」

完全題目

[]

枚数： 1 2 3 4 5 6、 または () 枚

「○つける」

挿絵等 有・なし

提出日 (年 月 日)

そして新学期になり先ずプリントアウト原稿を提出させ、大きな間違いやミスなどを専

門課程の学生たちが編集委員となり校正し、当該学生に修正箇所を指示し、いよいよデータの提出となる。提出人数が多くなってきたので校正・修正もなかなか難しくなっている。今後の課題でもある。

以下に示したのが新学期になってから配布した資料である。これを夏までに渡すと、まちがって先にデータを送ってくる者が必ずいる。慎重にそして、紛失に対する備えとして、提出前の配布とする。

データ送付について

- ・プリントアウトした紙の論文を提出した者は、指示を聞いて、必ず10月中に下にあるメールアドレスに、完成版データを添付して送ること。(期限厳守)

※ 注意事項

- 1.メールのタイトルには

金3 「B：ハックルベリー」 山口太郎 2ページ

というふうに授業の曜日、時限、「ABコースの別：タイトル(略可)」、氏名、全ページ数を記入しておくこと。

- 2.メールの本文にはもう一度、曜日、時限、さらに、(シート番号、) 論の

完全タイトル、専攻、学籍番号、氏名(ふりがな付き)、全ページ数、プ

リント提出日、イラスト・写真等の使用有り無しを記入しておくこと。

+そのあと必ず添付する。*添付忘れがよくあるので注意。

- 3.10月中に必ず送ること。

教育用のアドレスなので、ex.が付いている。よく注意して、間違いなく送付するように。

データ提出先メールアドレス

××××@××××××

以上が提出までのすべての行程と指導書である。

作業の流れを示しながら、その文書に書かれた事柄を今回の論集作成の目的として、ここに表明した。時代は刻々と移り変わっていく。やがてブームと時代が過ぎたように見えるジャンルにも新たな価値が見いだされ、また復興の時代が来ないとも限らない。過ぎ去ったものをヤドカリのように脱ぎ捨てて去っていくことも可能だが、それらに新たな灯をともし、新時代に向けた新たな展開を準備しておくことも、また同時に必要なことなのかもしれない。

大阪教育大学 美国文学研究室 研究活动介绍

郭华（大学院国际文化专业·欧美文化研究）

大阪教育大学欧美文化专业的桥本贤二教授长年以来一直致力于美国文学的研究，以桥本教授为中心的大阪教育大学美国文学研究室在教师和学生们的共同努力下，近几年来出版了7册关于美国文学和文化研究的论文集，并受到了广泛的好评。这些论文集被送到了包括中国以及世界各国的大学，国立图书馆以及研究机构。

2003年大阪教育大学美国文化研究室第一次出版了以美国娱乐生活为题材的论文集『美国的娱乐世界』。学生们通过亲身体验，现场取材以及相互讨论，并将自己感兴趣的事情，如美国饮食文化，连环画，体育，电影，游乐园以及购物等扑捉人心的话题写成论文刊登在了这次的论文集上。通过这次尝试性的出版活动，教师和学生们的愉快教学和快乐学习的魅力。

2004年度美国文化研究室尝试了日本国内遗留下来的美国文化研究，主题是『战前日美交流史 - 在日本发现的美国文化』。现代的日本随时随地可以见到从美国传来的文化气息。学生们通过对第二次世界大战前日美交流时遗留下来的建筑物，风土人情以及趣事趣闻的探索研究，记录并保存了大量的相关资料，他们的足迹踏遍了神户，，大阪，横滨以及九州大地。这次的出版受到了日本全国各地的图书馆的重视，应他们的要求，这次出版的论文集被收藏并永久保存在许多的国立图书馆内。

2005年度出版的『美国文学史中的美国文化研究』比以往有了质和量的提高。以“美国文学史”的听课生为主的学生们，课堂上通过从发现美洲新大陆到现代美国这段历史的学习，找出最让自己心动的课题，带着对美国文化探索的心情，进行调查研究和讨论。并且通过阅读小说和了解作者的经历，来感受美国文化的起源，魅力和异国文化的差异。

2006年度出版了『日本人，流行，文化 - 日本的年轻人和大众文化的今天』。这次出版的内容和以往不一样，暂时远离了美国文化，以将日本文化传送到海外为目的，进行了挑战。现在的日本年轻人当中都在流行什么，将这些信息传送给国外年轻人，和他们进行交流是这次出版的企划。同时这次出版得到了校内许多外国留学生的支持，他们把在日本生活期间的所见所闻和感受，分别用英语，法语和中文等多国语言写成文章登在了这次的论文集上。这次的论文集也首次得到了德国国立图书馆的青睐，有幸被保存在馆内。通过这次论文集的介绍，大阪最受年轻人喜爱的领导亚洲流行时尚的御堂大道扩大了它的知名度。

2007年度出版的『通过历史，名人，作品，电影来学习美国文学』包括了从过去到现在的全领域的美国文学历史，通过小说，电影，演讲，音乐，诗歌，舞台剧中出现的语言，和这些语言所表现出的行为，进行了文学研究。学生们通过这些学习找出自己喜欢的

亮点，写出了大量的议论性文章。由于这次出版采用了与以往不同的新颖做法，得到了更多的图书馆和研究机构的支持和关注。

2008 年度出版的『美国电影研究』不仅招集了美国文学研究专业的学生，同时也招集了一般英语科目的听讲生。在全校范围内扩大了这本论文集的知名度。这次出版活动利用了影响以及网络等各种多媒体手段，以影像文学为主要对象，对大量的反应美国文学的电影进行了深入研究。超过 100 名的学生们通过观赏世界电影名作，记录下其中捕捉人心的精彩画面，同时进行了文字编辑。在全校众多的师生的共同努力下，这本以研究美国电影为主题的论文集获得了前所未有的成功。

今年即将出版的论文集的题目定为『故事的魔力 - 欧美文学的再叙』。复兴文学和文学教育和让文学在年轻人中复苏是这本论文集的最初企画。我们期待着这次的出版能够得到越来越多的世界各国的大学生和爱好文学文化的各界人士的关注。同时希望更多的中国朋友们能够和我们一起分享探讨文学文化的魅力。

为了让全世界爱好文学的朋友们能够了解大阪教育大学美国文学研究室的工作内容和情况，到目前出版的所有论文集都被刊登在了大阪教育大学图书馆的网络公开系统上。为打算来日本留学，来大阪教育大学留学的外国学生们提供了有利的相关信息。大阪教育大学是一所重视国际文化交流的国立名牌大学，与世界上很多大学结成姐妹学校，进行着频繁的文化交流和研究。曾经在桥本教授研究室学习过的许多美国留学生，即使完成学业归国后，也坚持不断地积极投稿。我是大阪教育大学的中国留学生，曾经写过的一篇介绍大阪的美国村的文章有幸被刊登在了 2006 年的论文集上。大阪的美国村聚集了世界上最新的流行趋势，服饰，音乐，舞蹈，饰品，发式等等。在那里年轻人们常常自发的聚集到一起，进行各种街头表演，让你看得眼花缭乱，目瞪口呆。在那里你可以第一线了解到世界上的最新流行事物，可以和各国的年轻人进行交流。

虽然目前桥本教授的美国文学研究室出版的论文集基本上是用日语编辑的，但是我们希望通过这个简单的中文介绍能够让更多的中国友人来了解我们的研究内容，让一些懂得日文的中国朋友先来读读看。这是我们研究室迈向和中国文学文化爱好者交流的第一步。今后，通过研究教育，和更多的中国朋友进行更亲密友好的交流是大阪教育大学美国文化研究室师生们的共同愿望。